

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

## 研修報告書 (2019年度 助成者)

2019年11月 29日

氏名 (フリガナ)	太田 雅子
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2019年10月27日 (日) ~ 11月2日 (土)
所属機関名	聖隷浜松病院
身分	病棟看護師

日本とアメリカで違うところはたくさんありますが、1番強く感じたことは、アメリカでは自律性を非常に重んじるというところです。就職するにしても自分で病棟に申し込み、自分の人生設計をどのように組み立てたいかを考え、自分で全て決定していきます。日本では、看護学校を卒業し、病院に勤め、自分のライフスタイルに応じて働き方を変えていくのが一般的であるように感じます。自分の将来を想像し、自分で創造することは日本にいてもできるはずですが、海外で働いてもいい、専門分野を極めてもいい、そのほかの方法を模索してもいい。看護師の未来が多岐にわたることは、私が働いていく上で大きな希望になります。

マグネット認定を受けているプロビデンス・セント・メディカルセンターに見学に行き、説明を受けました。この研修の中で1番興味があった病院でした。マグネット認定を取得することでもたらされる1番のメリットはなんですか?の質問に対して「看護師の声が病院の運営に届くことです。看護師は組織に影響を与えられる人なんです」と話されたことが印象的でした。看護師の仕事をそのようにとらえたことが自分にあっただろうかと、理想の持ち方に驚きました。

アメリカの医療は分業化されており、看護師は看護師の仕事に専念して行う、基本的に残業は行わない、業務分析や病棟管理は管理者の仕事で、管理者は管理者の仕事のみを行っていました。アメリカの医療はGDPの2割が医療費に当たるほど高額で、医療にかけられる支出も違います。そのため、看護師を補助するスタッフも多く、物品管理も例を挙げれば、はかりの上に物品が置かれ、業者が減ったグラム分の物品を定期的に補充するそうです。外来患者とのやりとりも日本では電話が基本ですが、アメリカではメール対応が主で、テレビ電話を使用した遠隔治療も当たり前のように行われているそうです。効率的に仕事が進むように、最先端の物品、テクノロジー、人材確保がされていました。日本の看護師はマルチタスク過ぎるようになります。仕事に真摯で献身的に向かいますが、役割や業務が多岐にわたると、いつしか疲れてしまうこともあります。仕事のことを好きで居続けるために業務整理や改善は必要であるし、続けていきたいと感じました。

アメリカに行き、関わるすべての人が、相手を大事にし、自分を愛し、人生を謳歌していると感じました。アメリカの優れたところ、自分が日本人であること、様々な気付きのある研修でした。アメリカの医療や看護をみて羨ましいと感じることが多かったのですが、日本の看護を見直してみると、ここまで皆が献身的で患者のすべてを理解しようとする看護はとても価値のあるものに思えました。アメリカのようにできる医療技術が豊富ではありませんが、しかし、私たちだからできることも多くあります。退院支援や癌看護、患者を深く理解し、患者の望む未来に導こうとします。目に見えないものだからこそ、誇りをもつこと、そしてそれを応援する手助けをしていきたいと研修から帰ってきて、働いて、改めて感じています。